

優秀賞

私の選んだ道

鹿児島市立宮小学校 6年 新保 優愛

「プリキユア」と「医者」。最初の別れ道を決めてくれたのは、病院の若いおじちゃん先生だった。

私は、小さいころ、よくひぎやひじの辺りをかきむしっており、皮がむけて血がにじんでいたりかさかさしたりしていた。そのたびに、

「病院に行くよ。」

と父が休みになるのを待って、病院へ行った。そこで出会った若いおじちゃん先生。

「アトピー性皮膚ふえんだね。薬を出すね。」

一目見て病気を当てて、さつと薬を出してくれる。その薬をぬり数日たつと不思議とかゆみが落ち着いてくる。すごい。医者が私のあこがれとなった。そんな日常をくり返すうち、自分のゴールは医者になった。

次の分かれ道はある日突然やってきた。それはテレビのドキュメンタリー。そこで、自分と同じくらいの子どもが病気と向きにたたかっている姿を見た。生きること必死な子どもたちが明るく元気に生きている。それを見て私も支えたいと思った。道のゴールが「小児科医」に変わった。

それからできること探しが始まった。勉強は当たり前。それ以外で見つけたこと。まずはあいさつをしつかりして人とのコミュニケーションをとること。次に、様々な子どもと接する小児科医だから、常に友達や家族と接する態度や会話に相手を思いやる心をもたせること。最後に、かん者との会話で不安を和らげる言葉を使うために、国語辞典を使い語を増やすこと。毎日行っていくのは、すごく大変でやめたくなくなるときもある。でも自分で決めた道。一步一步ふみしめていく。

かん者の道を支えることができるのが医者という職業だ。時に医者は、自分の道だけでなく他人の道を左右する判断や覚悟が必要になる。大きな夢をもった子どもを支える小児科医。その小児科医というゴールに向かってまっすぐのびる道の中に私はいる。